

スクリュードライバー

「かさねちゃん」になることを夢見る空間

from 新栄小学校

十一月二十一日(金)、「劇団たんぽぽ」の団員のみなさんをお招きし、親子観劇会を行いました。

「かさねちゃんにきいてみな」という演目で、子どもたちにも身近な通学団の朝の集合場面から物語は始まります。
・朝からいつも騒がしい。
・誰もまじめに歩かない。

ミツ、太郎、リュウセイ、ミギー。個性豊かで手に負えない四名のヘンテコリンな班員たちをまとめる六年生のカリスマ班長「かさねちゃん」と自信がもてない五年生の副班長ユッキーを中心に物語は進みます。子どもたちは、登場人物に自分を重ねながら物語の世界に入り込んでいきました。移動する空間を表現するために、ある場面では人形や影絵で演じたり、また別の場面では客席をぐるりと回る花道を使ったりするダイナミックな演出で、観客も班の一員となって、ともに笑ったり涙したりしました。

劇の途中、リュウセイが転校してしまいます。それまでは、けんかしたり、暴走したりして大変だったけれど、ユッキーたちは、いなくなつて初めて大切な仲間だったことに気付きます。そして、みんなで引越した家までプレゼントを渡しに行く中で、仲間との絆を深めていきます。最後にはリュウセイも通学団に戻ってきて、ヘンテコリ

な班が復活します。そんなとき新班長のユッキーは、かさねちゃんがポツリと言った一言を思い出します。
「私は一人じゃないんだよ。後ろにみんながいてくれるから大丈夫って前を歩けるんだよ。何があつてもバッチこい！ってね。」
観劇後、代表児童の挨拶の中に「私も班の仲間を信じてがんばりたい」という言葉がありました。この言葉こそ物語が伝えたかったメッセージではないでしょうか。子どもたちが「かさねちゃん」になることを夢見て、仲間との絆を感じ、成長していつてくれることを願います。



第百七十四話

伊勢山の芸能祭

今から七十年ほど昔、芝居が好き

な五十歳過ぎの人が正月に集まって素人芝居をやるうと言

い出しました。演題は寺子屋と車引き、彦山権現、岩

見重太郎の大蛇退治と決まりました。

芝居の稽古が始まると、青年会が「おれたちも伊勢山に昔から伝わる住吉踊を披露したい」と言うので、屋敷の老人に頼んで、踊りの練習を始めました。すると、兄ちゃんがやるなら私もやりたい、あの娘がやるならうちの娘にもやらせたいと、次から次へ話が広まりました。五歳から小学六年生の女の子がみんな踊りの練習をやりだしました。

一か月以上も練習して、いよいよ幕あけ近くになると、芝居をやる人は親戚から幟をもらいました。すると、あの人がもううならおれも



もらわないかん、兄ちゃんがもううなら子供たちも、と皆が幟をもらいました。一人で五本も七本ももらったので、幟の数は出演者三十人で二百本あまりにもなりました。
地域ぐるみで盛り上がり、神明社の前の空き地には芝居小屋を造ることにになりました。とび職の人たちが腕によりをかけて小屋を造ったので、歌舞伎座をしのぐ素晴らしい小屋になりました。いよいよ当日になると、東は今の空港口から西は伊勢山のバス停まで、二百本の幟が風にはためき見事な風景を呈しました。
今は昔の物語です。
(豊山町文化財研究会の郷土文集を参考にしました)



まなびすと